

# 親の養育態度が大学生の不登校傾向に及ぼす影響 —賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および対人ストレスを媒介変数 として—

堀綾華<sup>1</sup>・長谷川晃<sup>2</sup>

(1: 東海学院大学大学院人間関係学研究科, 2: 東海学院大学人間関係学部)

## 要 約

本研究では、16歳までに体験した親の養育行動が、大学生の調査時点における不登校傾向に与える影響について検討した。大学生204名(平均年齢19.95歳,  $SD=3.33$ )を対象に質問紙調査を実施し、親の養育態度、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、対人ストレスおよび不登校傾向を測定した。分析の結果、母親の過干渉は賞賛獲得欲求の増加を介して登校回避感情に負の影響を与え、対人ストレスの増加を介して正の影響を及ぼすことが示された。また、母親の過干渉は賞賛獲得欲求と対人ストレスの増加を介して登校回避行動に正の影響を与え、拒否回避欲求の増加を介して負の影響を及ぼすことが示された。さらに、母親の温かさは賞賛獲得欲求の増加を介して登校回避行動に正の影響を与え、拒否回避欲求の増加を介して負の影響を及ぼすことが示された。以上より、母親の養育態度が不登校傾向に正の影響を及ぼすメカニズムもあれば、負の影響を及ぼすメカニズムもあることが示された。一方、父親の養育態度は母親の養育態度よりも不登校傾向に及ぼす影響が弱かった。

キーワード：不登校傾向、養育態度、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、対人ストレス

(2018.9.21 受稿 査読審査を経て 2018.10.26 受理)

## 問題と目的

文部科学省は不登校を、何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち、病院や経済的な理由による者を除いたものと定義している(文部科学省初等中等教育局児童生徒課, 2018)。近年、教育現場では児童生徒の不登校が増加しており、不登校となった児童生徒への援助や不登校を防ぐための支援の確立が叫ばれている。これを受けて、不登校および不登校傾向に対する研究も数多く行われている。

従来の不登校研究の中心は小学生や中学生であったが、近年大学生の不登校についても注目が集まっている。水田(2009, 2010)は「大学生の不登校数は0.7—2.9%(全国の大学生約280万人中2.0—8.1万人)と推定されている。」と述べており、大学生の不登校も少なからず存在することが明らかとなっている。しかし大学生の不登校につい

での研究は数が少ない。

堀井(2013)は大学生の不登校研究が今一つ伸び悩んでいる背景には、信頼性と妥当性を十分に備えた尺度が存在しないことがあると考え、大学生不登校傾向尺度を作成した。本尺度は、授業に出席している大学生を対象としており、その層に認められる不登校傾向を測定することを目的とした尺度である。大学生不登校傾向尺度は、大学への登校を回避する感情的側面を表す「登校回避感情」と、行動的側面を表す「登校回避行動」から構成される。

大学生を対象とした先行研究の結果から、不登校傾向が他者に対する不安や個人の心的な問題と関連することが伺える。例えば、大学生の対人恐怖心性は、登校回避感情と登校回避行動の両側面と関連する(堀井, 2014)。また、「大学不適応感」、「学業脱落」、「心身不調」が直接的に大学生の不登校傾向の増加に、「自己否定感」が登校回避感情の増加を介して大学生の登校回避行動に影響を与えることが示され、心理的要因が大学生の不登校傾向の

増加と関連することが示唆された(堀井, 2016)。

以上のようにこれまでの研究では、大学生の不登校傾向を規定する要因についてさまざまな検討が行われているが個人内の要因を取り挙げたものが多く、家庭環境について検討した研究は少ない。そこで本研究では、大学生の不登校傾向に及ぼす親の養育態度の影響に着目し、検討を行う。

子どもにとって親ははじめて関わりをもつ他者であり、親の養育態度が子どものパーソナリティや社会生活に与える影響について古くからさまざまな研究結果が報告されている。Parker, Tupling, & Brown (1979)は、16歳までに体験した両親の養育態度を成人した子どもの記憶にしたがって調査する質問紙である Parental Bonding Instrument (PBI)を作成した。本尺度は、温かい養育をする「温かさ(care)」と子どもに対し過剰に干渉をする「過干渉(over-protection)」の2因子から構成される。

先行研究では、PBIによる親の養育態度と他の要因とのさまざまな関連が報告されており、そこから、過干渉は不適応的な因子であり、温かさは適応的な因子であることが伺える。例えば、親が過干渉であるほど内的作業モデルの不安が高く、温かさが低いほど内的作業モデルの回避が高くなる(島, 2014)。また、母親の温かい養育態度が児童の抑うつ性の低さや、成人のうつ病を発症する危険性の低さと関連する(Sato et al., 1997; 菅原他, 2002)。さらに、堀井(2016)は心理的要因が不登校傾向と関連することを見出している。そのため本研究では、親の養育態度が大学生の賞賛獲得欲求および拒否回避欲求や対人ストレスを介して不登校傾向に影響を及ぼすと想定する。

賞賛獲得欲求と拒否回避欲求は他者からの評価に対する主な欲求である。賞賛獲得欲求とは、対人場面において周囲から注目を集めたり、人を感心させたりするといった肯定的な評価を獲得しようとする欲求である。一方、拒否回避欲求とは、周囲から嘲笑されたり、嫌われたりするといった否定的な評価を回避しようとする欲求である(小島・太田・菅原, 2003)。

先行研究では、賞賛獲得欲求や拒否回避欲求と不適応の指標との関連が報告されており、そこから、賞賛獲得欲求は適応的な欲求であり、拒否回避欲求は不適応的な欲求であることが伺える。両欲求との関連が検討されている変数の一例として、対人不安が挙げられる。例えば、笹川・猪口(2012)は、大学生を対象とした調査を行い、拒否回避欲求と対人不安傾向は一貫して関連していたが、賞賛獲得欲求と対人不安傾向は互いに無関連であること

が示された。また、佐々木・菅原・丹野(2001)が行った大学生を対象とした調査では、拒否回避欲求が高いと対人不安傾向が高くなり、賞賛獲得欲求が高いと対人不安傾向が低くなることが示された。

一方、対人ストレスとは、対人関係に起因するストレスである(橋本, 1997)。対人葛藤、対人劣等、対人摩擦などに分類される対人ストレスはそれぞれの出来事の経験頻度が高いほど精神的健康が損なわれることが示されている(橋本, 2000; 関口・三浦・岡安, 2011)。

いくつかの先行研究から、親の養育態度が賞賛獲得欲求、拒否回避欲求および対人ストレスと関連することが示唆される。例えば、三ツ村・高木(2011)は、父親や母親との関係の良好さが、大学生の賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の高さと関連することを示した。また、森田・養崎・宇田川・嶋田(2015)は、親の子どもに対する攻撃的な養育が、子どもである中学生の攻撃行動を増加させることを示した。攻撃行動が対人ストレスの増加を導くと考えられるため、森田他(2015)で得られた知見は、親の養育態度と対人ストレスの関連を間接的に示唆する。

本研究では、普段授業に出席できている大学生を対象とし、その集団において示される不登校傾向の規定因として親の養育態度、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および対人ストレスを取り上げる。そして、親の養育態度が賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および対人ストレスを介して大学生の不登校傾向に影響を与えると仮定し、以下の仮説を検証する。仮説 1) 親が過干渉であった者は、親から拒否されたり、嫌われたりしないようにし、親の意見、指示を受け入れることが多くなり、親以外の他者に対しても拒否されないよう行動することが多くなるだろう。そのため、親の過干渉が拒否回避欲求に正の影響を及ぼすことが予想される。仮説 2) 親が過干渉であった者は、親の意見や指示を受け入れて行動することが多くなるが、大学生になると自身の意見を聞かれる場面や言われるがままに行動するだけではうまくやっつけられない場面が多くなり、他者とうまく付き合っていくことが難しくなるだろう。そのため、親の過干渉が対人ストレスに正の影響を及ぼすことが予想される。仮説 3) 親から温かい養育を受けた者は、親と同じように他者からも賞賛され、認められたいという思いが強くなる。そのため、親の温かい養育態度が賞賛獲得欲求に正の影響を及ぼすことが予想される。仮説 4) 親から温かい養育を受けた者は、親が自分のことを受け入れてくれるために、他者からの拒絶を恐れなくなるだろう。そのため、親の温かい養育

態度が拒否回避欲求に負の影響を及ぼすことが予想される。仮説 5) 親から温かい養育を受けた者は、親が自分の意見や意思を受け入れ認めてくれることが多いため、モデリングをすることにより、他者との関係において相手を認めるといった行動が多くなり、他者と良好な関係を築きやすくなるだろう。そのため、親の温かい養育態度が対人ストレスに負の影響を及ぼすことが予想される。仮説 6) 拒否回避欲求が高い者は、他者から拒否されないために、日常的に人に気をを使う。また、人の顔色をうかがいながら過ごしている。これらの者は、他者から拒否されないように他者との接触を回避しようとするため、拒否回避欲求は登校回避感情や行動に正の影響を与えることが予想される。仮説 7) 対人ストレスを多く経験する者は、日常的に他者との関係がうまくいっていないかたり、対人関係で悩みを持っていたりすることが多いだろう。対人関係においてストレスを多く経験していると、ストレスをなくすために他者との関わりを避けようとすると考えられる。そのため、対人ストレスは登校回避感情と登校回避行動に正の影響を与えることが予想される。

なお、親の過干渉と賞賛獲得欲求の関連については、親が過干渉であった場合、親の指示や意見をそのまま受け入れるために自分で意思決定をすることが少なく、自分の意見を親に褒めてもらうことも少ない。親に十分褒めてもらえなかったために親から褒めてもらうことをあきらめ、他者から賞賛されたいと思うようになるだろう。そのため、親の過干渉は賞賛獲得欲求に正の影響を与えることが予想される。しかし、他の変数との関連から、PBIの過干渉は不適応的な因子であることが示されている(島, 2014), 賞賛獲得欲求は適応的な因子であることが示唆されている(佐々木他, 2001; 笹川・猪口, 2012)。そのため、親の過干渉は賞賛獲得欲求に負の影響を与えることも予想される。以上を踏まえ、本研究ではどちらの影響が認められるのか探索する。また、賞賛獲得欲求が高い者が対人ストレスを経験すると、自分は他者から賞賛されるどころがないのだと自信がなくなり、他者と関わるのが嫌になると考えられる。そのため、賞賛獲得欲求と対人ストレスの交互作用が登校回避感情や行動の増加を導くのかについても探索する。同様に、拒否回避欲求についても対人ストレスとの交互作用を探索する。

## 方法

### 調査対象者

東海地方の4年制大学に在籍している大学生235名を対象とした調査を行った。全対象者のうち、PBIの母親に関する回答と父親に関する回答の両方で欠損値が認められた者、PBI以外のいずれかの尺度で欠損値が認められた者、および回答に不備があったものを除外し、204名(男性90名、女性114名、平均年齢19.95歳、 $SD=3.33$ )を有効回答者とした。

### 質問紙の構成

Parental Bonding Instrument(PBI; Kitamura & Suzuki, 1995) 子どもから見た母親と父親の養育態度に対する自己評価スケールであり、Parker(1979)が作成した尺度を Kitamura & Suzuki(1995)が翻訳した日本語版を用いた。本尺度は、「温かさ」と「過干渉」の2つの因子で構成される。全25項目に対して「全く該当しない(0)」から「該当する(3)」までの4件法で回答を求めた。因子毎に合計得点を算出し、分析で用いた。

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度(小島他, 2003) 対人場面において周囲から注目を集めたり、人を感心させたりするといった肯定的な評価を獲得しようとする欲求である「賞賛獲得欲求」と、周囲から嘲笑されたり、嫌われたりするといった否定的な評価を回避しようとする「拒否回避欲求」の程度を測定する尺度である。全31項目に対して、「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で回答を求めた。因子毎に合計得点を算出し、分析で用いた。

対人ストレスイベント尺度(橋本, 1997) 対人関係に起因するストレスを測定する尺度である。全30項目からなり、「全くなかった(1)」から「しばしばあった(4)」までの4件法で回答を求めた。本尺度は、「対人葛藤」、「対人劣等」、および「対人磨耗」という3因子から構成されるが、本研究では分析の対象とする変数を減らすために全項目の合計得点を算出し、分析の対象とした。以後、本尺度の合計得点を「対人ストレス」と表記する。

大学生不登校傾向尺度(堀井, 2013) 大学生の不登校傾向(大学の正課活動に対する回避傾向)を測定する尺度である。本尺度は、大学への登校を回避する感情的側面を表す「登校回避感情」と、行動的側面を表す「登校回避行動」の2因子から構成される。全12項目に対して、「全然あてはまらない(0)」から「非常にあてはまる(6)」までの7件法で回答を求めた。因子毎に合計得点を算出し、分析で用いた。

### 手続き

調査は大学の教室で行った。大学の授業終了後に、そ

## 親の養育態度が大学生の不登校傾向に及ぼす影響

の授業の受講者に対して調査参加の協力を依頼した。その際、調査への参加は任意であり、参加しないことによって不利益な対応を受けることはないこと、回答中に都合で止めても構わないこと、調査のデータは数量化されるため、個人の情報が公開される恐れはないことを説明した。これらの内容に同意した者に対して、質問紙に回答を求めた。なお、カウンターバランスをとるために、質問紙の提示順序を変えた2種類の冊子を配布した。本研究の実施内容については、東海学院大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会より承認を得た(承認番号：2018-17)。

## 結果

Table 1 に各尺度の記述統計量を示した。研究で使った尺度の内的整合性はいずれも高いことが示された。次に、Table 2 に尺度間の相関係数を示した。登校回避感情は拒否回避欲求や対人ストレスと正の有意な相関が認められ、父親の温かさと負の有意な相関が認められた。また、登校回避行動は母親と父親の過干渉、賞賛獲得欲求、および対人ストレスと正の有意な相関が認められ、母親と父親の温かさと負の有意な相関が認められた。また、登校回避感情と登校回避行動の間には、弱いながらも正の有意な相関が示された。

続いて両親の養育態度が登校回避感情および登校回避行動に及ぼす影響のメカニズムについて検討を行った。まず、賞賛獲得欲求および拒否回避欲求と対人ストレスの交互作用が登校回避感情と登校回避行動に及ぼす影響

について検討するために、階層的重回帰分析を行った。なお、PBIの母親の得点を用いた分析と父親の得点を用いた分析に分けて行った。本研究では、母親と父親の養育態度を外生変数、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、および対人ストレスを媒介変数として位置づけた。そのため、独立変数には、ステップ1で母親ないし父親の過干渉と温かさを、ステップ2で賞賛獲得欲求、拒否回避欲求および対人ストレスを投入し、その上で、ステップ3において賞賛獲得欲求と対人ストレスの交互作用項、および拒否回避欲求と対人ストレスの交互作用項を投入した。以下では、各ステップにおける決定係数の増加量と、ステップ3における各交互作用項の影響のみ記載する。

PBIの母親の得点を用いた場合、登校回避感情を従属変数とした分析において、ステップ1の決定係数は有意ではなかったが( $\Delta R^2 = .01, p = .53$ )、ステップ2では有

Table 1 各尺度の記述統計量

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>
母親過干渉	199	13.16	6.61	.81
母親温かさ	199	24.99	7.68	.92
父親過干渉	184	13.21	6.46	.79
父親温かさ	184	21.57	8.06	.91
賞賛獲得欲求	204	21.74	5.52	.83
拒否回避欲求	204	30.33	8.02	.91
対人ストレス	204	66.75	18.10	.94
登校回避感情	204	22.76	7.40	.78
登校回避行動	204	11.14	9.80	.90

Table 2 尺度間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 母親過干渉								
2. 母親温かさ	-.57 **							
3. 父親過干渉	.58 **	-.43 **						
4. 父親温かさ	-.33 **	.47 **	-.57 **					
5. 賞賛獲得欲求	.19 **	.03	.17 *	-.13				
6. 拒否回避欲求	.04	.15 *	.07	-.04	.33 **			
7. 対人ストレス	.30 **	-.22 **	.20 **	-.26 **	.22 **	.38 **		
8. 登校回避感情	.07	-.08	.04	-.15 *	-.05	.18 *	.27 **	
9. 登校回避行動	.24 **	-.20 **	.19 **	-.21 **	.17 *	-.07	.31 **	.32 **

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

意であった( $\Delta R^2 = .09, p < .01$ )。ステップ3の決定係数は有意ではなく( $\Delta R^2 = .01, p = .24$ )、交互作用項の標準偏回帰係数はいずれも有意ではなかった( $-.03 \leq \beta \leq .13, p > .09$ )。登校回避行動を従属変数とした分析では、ステップ1とステップ2では決定係数が有意であったが(それぞれ  $\Delta R^2 = .06, .11, p < .01$ )、ステップ3では有意ではなかった( $\Delta R^2 = .01, p = .59$ )。交互作用項の標準偏回帰係数はいずれも有意ではなかった( $-.06 \leq \beta \leq .06$ , 共に  $p > .38$ )。

次に、PBIの父親の得点を用いた場合、登校回避感情を従属変数とした分析において、ステップ1の決定係数は有意ではなかったが( $\Delta R^2 = .02, p = .12$ )、父親温かさの標準偏回帰係数が有意であった( $\beta = -.18, p < .05$ )。また、ステップ2の決定係数は有意であったが( $\Delta R^2 = .07, p < .01$ )、ステップ3の決定係数は有意ではなかった( $\Delta R^2 = .01, p = .41$ )。交互作用項の標準偏回帰係数はいずれも有意ではなかった( $-.05 \leq \beta \leq .10, p > .18$ )。登校回避行動を従属変数とした分析では、ステップ1とステップ2では決定係数が有意であったが(それぞれ  $\Delta R^2 = .05, .11$ , 共に  $p < .01$ )、ステップ3では有意ではなかった( $\Delta R^2 = .01, p = .56$ )。交互作用項の標準偏回帰係数はいずれも有意ではなかった( $-.08 \leq \beta \leq .04, p > .29$ )。

以上の結果より、賞賛獲得欲求および拒否回避欲求と対人ストレスの交互作用が登校回避感情や登校回避行動に影響を及ぼしていないことが示された。そのため、次に行うパス解析では、これらの交互作用項をモデルに含めなかった。また、登校回避感情を従属変数とした分析では、いずれも両親の養育態度を投入したステップ1の決定係数が有意ではなかった。そのため、登校回避感情を強める過程に両親の養育態度を含めることには慎重になる必要があるが、登校回避行動に対する影響過程との比較を行うために、登校回避感情に対する影響過程の外生変数にも両親の養育態度を設定した。

まず、母親の過干渉と温かさを外生変数、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求および対人ストレスを媒介変数、登校回避感情および登校回避行動を従属変数とした最尤推定法によるパス解析を行った。外生変数からすべての媒介変数と従属変数にパスを引き、媒介変数からすべての従属変数にもパスを引いた。また、外生変数、媒介変数の誤差変数間、および従属変数の誤差変数間に相関を仮定した。その結果を Figure 1 に示した。なお、以下のモデルは飽和モデルであるため適合度は算出されなかった。

母親の過干渉は賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、および

対人ストレスに正の影響を与え、母親の温かさは賞賛獲得欲求、拒否回避欲求に正の影響を与えることが示された。賞賛獲得欲求は登校回避感情への負の影響が有意傾向であり、登校回避行動に正の影響を与えた。拒否回避欲求は登校回避感情への正の影響が有意傾向であり、登校回避行動に負の有意な影響を与えた。対人ストレスは登校回避感情と登校回避行動に正の影響を与えることが示された。

母親の過干渉と温かさが賞賛獲得欲求、拒否回避欲求および対人ストレス合計を介して不登校傾向に影響を与えているのか検討するために、A. F. Hayes のホームページに公開されている The PROCESS macro for SPSS (Hayes, 2017)を用いて、ブートストラップ法による媒介分析を行った(リサンプリング回数 10,000 回)。なお、95%CI はバイアスを修正した値 (bias-corrected bootstrap)を用いた。登校回避感情を従属変数とした媒介分析を行った結果、母親の過干渉が賞賛獲得欲求を介して登校回避感情に負の影響を与え(標準化間接効果 =  $-.03, 95\%CI[-.09, -.00]$ )、対人ストレス合計を介して登校回避感情に正の影響を与えることが示された(標準化間接効果 =  $.05, 95\%CI[.01, .11]$ )。また、母親の温かさの登校回避感情に対する間接効果は有意ではなかった。

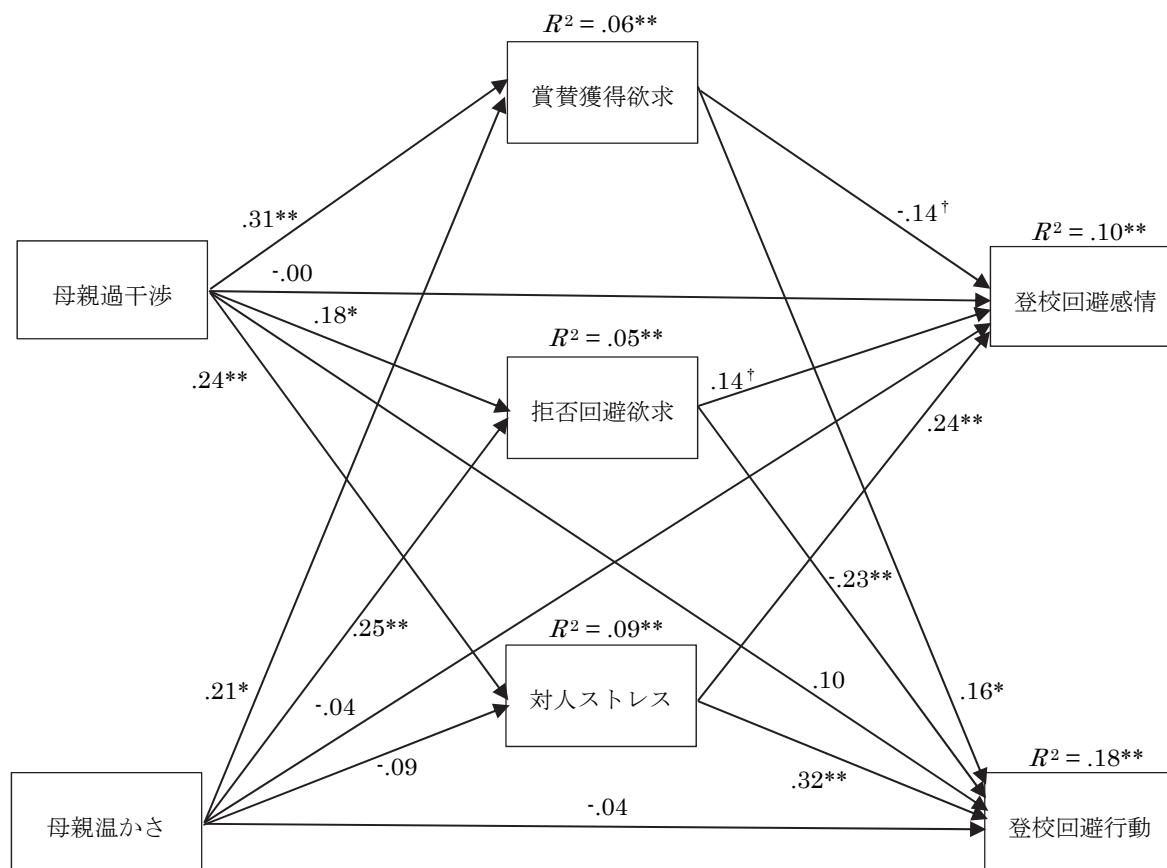
登校回避行動を従属変数とした分析の結果、母親の過干渉が賞賛獲得欲求と対人ストレス合計を介して登校回避行動に正の影響を与え(賞賛獲得欲求: 標準化間接効果 =  $.04, 95\%CI[.01, .09]$ ; 対人ストレス: 標準化間接効果 =  $.06, 95\%CI[.02, .13]$ )、拒否回避欲求を介して登校回避行動に負の影響を与えることが示された(標準化間接効果 =  $-.04, 95\%CI[-.10, -.00]$ )。さらに、母親の温かさが賞賛獲得欲求を介して登校回避行動に正の影響を与え(標準化間接効果 =  $.03, 95\%CL[.00, .08]$ )、拒否回避欲求を介して登校回避行動に負の影響を与えることが示された(標準化間接効果 =  $-.05, 95\%CI[-.12, -.01]$ )。

なお、性別によって共分散構造の等質性を検討するために、パス係数、分散共分散、および誤差分散に等値制約を置いたモデルを構成し、多母集団同時分析を行った。尤度比検定の結果、等値制約を置かないモデルとの間に有意な差が認められず( $\Delta\chi^2 = 36.67, p = .13$ )、性別の影響は無視できる範囲内であることが示された。

次に、父親の過干渉と温かさを外生変数としたパス解析を行った。その結果を Figure 2 に示した。

父親の過干渉から賞賛獲得欲求への正の影響が有意傾向であった。父親の温かさは対人ストレスに負の影響を

親の養育態度が大学生の不登校傾向に及ぼす影響



※観測変数間の相関や誤差変数間の相関については省略した。

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

Figure 1 母親の養育態度を外生変数としたパス解析の結果( $n = 199$ )

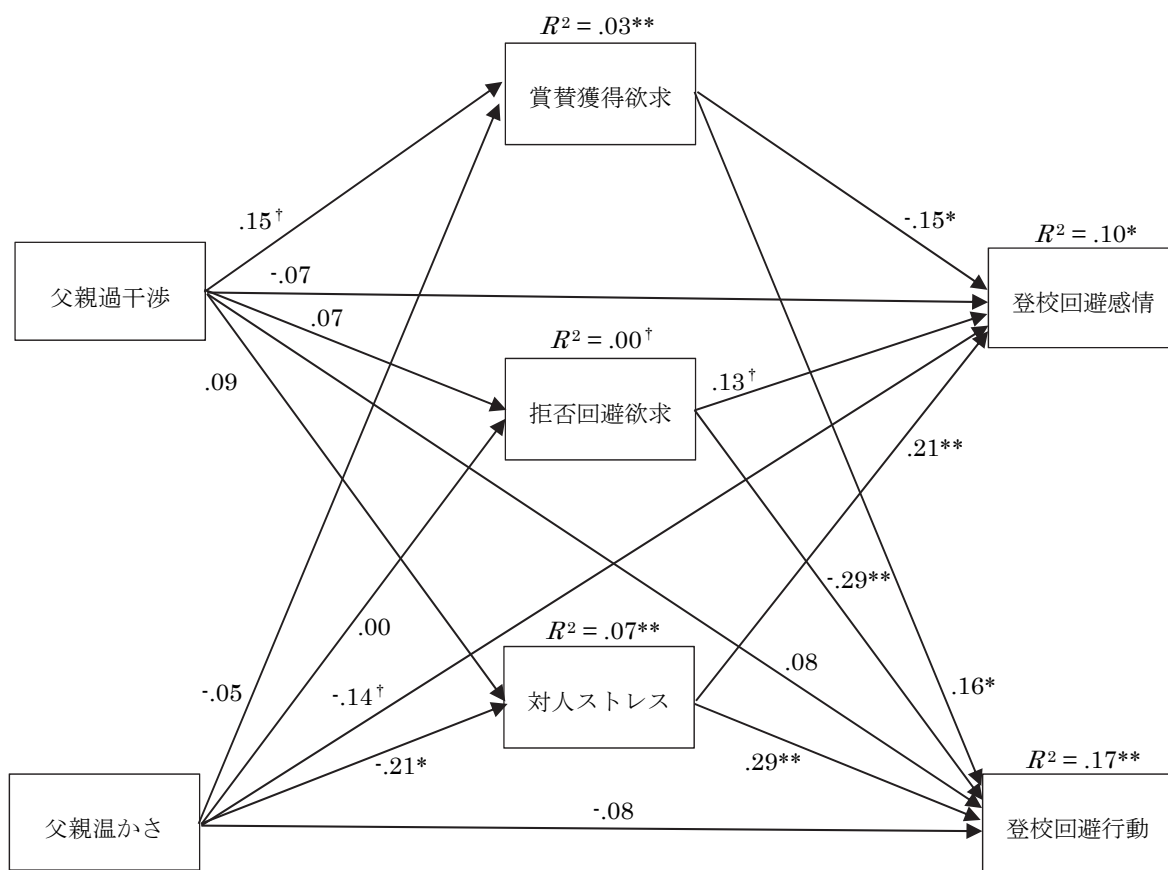
与え、登校回避感情への負の影響が有意傾向であった。賞賛獲得欲求は、登校回避感情に負の有意な影響を与え、登校回避行動に正の有意な影響を与えることが示された。拒否回避欲求は、登校回避感情への正の影響が有意傾向であり、登校回避行動に負の有意な影響を与えることが示された。対人ストレスは、登校回避感情と登校回避行動に正の影響を与えることが示された。

ブートストラップ法による媒介分析を行った結果、登校回避感情に対する父親の過干渉の間接効果はいずれも有意ではなかった。また、父親の温かさが対人ストレスを介して登校回避感情に負の影響を与えることが示された(標準化間接効果 =  $-.03$ , 95%CI[-.10, -.00])。一方、登校回避行動を従属変数とした媒介分析を行った結果、父親の過干渉のいずれの間接効果も認められなかった。また、父親の温かさは対人ストレスを介して登校回避行動に負の影響を与えることが示された(標準化間接効果 =  $-.05$ , 95%CI[-.12, -.01])。

なお、性別によって共分散構造の等質性を検討するために、パス係数、分散共分散、および誤差分散に等値制約を置いたモデルを構成し、多母集団同時分析を行った。尤度比検定の結果、等値制約を置かないモデルとの間に有意な差が認められず( $\Delta\chi^2 = 36.28$ ,  $p = .14$ )、性別の影響は無視できる範囲内であることが示された。

### 考察

本研究では、親の養育態度が賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および対人ストレスを介して大学生の不登校傾向に与える影響について検討することを目的とした。最初に、親の養育態度と賞賛獲得欲求、拒否回避欲求および対人ストレスの関連について考察する。母親の過干渉は拒否回避欲求に正の影響を及ぼしていたが、父親の過干渉と拒否回避欲求に有意な関連が認められなかった。そのため、仮説 1 は部分的に支持された。母親が過干渉であっ



※観測変数間の相関や誤差変数間の相関については省略した。

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ ,  $^\dagger p < .10$

Figure 2 父親の養育態度を外生変数としたパス解析の結果( $n = 184$ )

た者は、母親に拒否されないよう母親の意見を受け入れて行動することが多かったために他者に対しても拒否されないような行動をとるようになり、その結果、拒否回避欲求が高くなると考えられる。次に、母親の過干渉は対人ストレスに正の影響を及ぼしていたが、父親の過干渉と対人ストレスに有意な関連が認められなかった。そのため、仮説 2 は部分的に支持された。母親が過干渉であった者は、母親の意見や指示を受け入れて行動することが多くなるが、社会に出ると自身の意見を聞かれる場面や言われるがままに行動するだけではうまくやっけない場面が多くなり、他者とうまく付き合っていくことが難しくなる。その結果、対人ストレスが多くなると考えられる。

次に、母親の温かい養育態度は賞賛獲得欲求に正の影響を及ぼしていたが、父親の温かい養育態度と賞賛獲得欲求に有意な関連が認められなかった。そのため、仮説 3 は部分的に支持された。母親が温かい養育態度であった者は、母親と同じように他者からも賞賛されたい、認

められたいという思いが強くなり、その結果、賞賛獲得欲求が高くなると考えられる。また、母親の温かい養育態度は拒否回避欲求に正の影響を及ぼしていた。一方、父親の温かい養育態度と拒否回避欲求に有意な関連が認められず、仮説 4 は支持されなかった。本研究では、親から温かい養育を受けた者は、親が自分のことを受け入れてくれるために他者に拒否されたくないと思うことが少なくなるため、親の温かい養育態度が拒否回避欲求に負の影響を及ぼすと想定した。しかし、母親が温かい養育態度を示し、自分のことを受け入れてくれるために母親と同じように他者にも自分を受け入れてほしい、拒否されたくないと思ひ、拒否回避欲求が高くなるのだと考えられる。なお、仮説 1—4 において父親の養育に関連が認められなかったのは、父親は昼間働きに出ており、母親に比べると子どもとしかかわる時間が少なく、そのため、母親に比べ養育態度の影響が弱くなるのだと考えられる。

一方、母親と父親の過干渉は賞賛獲得欲求に正の影響

## 親の養育態度が大学生の不登校傾向に及ぼす影響

を及ぼした。親が過干渉であった者は、親の指示、意見をそのまま受け入れるため、自分で意思決定することが少なく、自分の意見を親に褒めてもらうことも少ない。親に十分褒めてもらえなかったために親から褒めてもらうことをあきらめ、他者から賞賛されたいと思うようになり、賞賛獲得欲求に正の影響を与えたことが考えられる。

また、母親の温かい養育態度と対人ストレスに有意な関連が認められず、父親の温かい養育態度は対人ストレスに負の影響を及ぼしていた。そのため、仮説5は部分的に支持された。母親の温かい養育態度は対人ストレスに影響を及ぼさないことが示された。父親は昼間働きに出ており、母親に比べると子どもとかわる時間が少ない。そのために父親が子どもとの関係をよりよく構築しようとし、父親が自分の意見を認めてくれることが多い環境で育った場合、他者を認めるといった行動が増え、他者と良好な関係を築きやすくなるため対人ストレスが弱くなると考えられる。

続いて、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求および対人ストレスと登校回避行動、登校回避感情との関連について考察する。拒否回避欲求は登校回避感情に正の影響を及ぼしていたが、登校回避行動に負の影響を及ぼしていた。そのため、仮説6は部分的に支持された。拒否回避欲求が強い者は他者から拒否されたくない、嫌われたくないという思いが強く日常的に人に気を使っているため、他者から拒否されないように他者との接触事態を回避しようとし、登校回避感情が高まるのだと考えられる。一方で、登校を回避する行動をとることで仲間の話題について行けず、仲間と距離ができ、仲間に拒否されるといったことが起こらないようにするために、登校するのだと考えられる。よって、「学校に行きたくない」といった感情としては出てくるが、実際の不登校には繋がらず、登校回避行動が減少すると考えられる。

一方、賞賛獲得欲求と対人ストレスの交互作用と登校回避感情および登校回避行動に有意な関連が認められなかったが、賞賛獲得欲求は登校回避感情に直接負の影響を及ぼし、また、登校回避行動に正の影響を及ぼすことが示唆された。対人不安との関連を検討した佐々木他(2001)や笹川・猪口(2012)の調査研究により、賞賛獲得欲求は適応的な欲求であることが示されている。賞賛獲得欲求が高い者は人から賞賛を得るために学習などにおいて努力をしており、そのために不適応的な因子である登校回避感情が減少したのだと考えられる。しかし、賞

賛獲得欲求は登校回避行動に正の影響を及ぼすことが示された。これは賞賛獲得欲求が高い者は人から賞賛を得ようと学習などにおいて努力を行っているために登校回避感情は減少するが、少なからず周囲の期待や圧力を感じており、それらが身体症状として表出するために登校回避行動が増加したものと考えられる。ただし、登校回避感情の増加が登校回避行動を導くと想定されているため(堀井, 2013)、登校回避感情が減少し、登校回避行動が高まるという結果についてはさらなる検討が必要である。

次に、対人ストレスは直接的に登校回避感情および登校回避行動に正の影響を及ぼしていた。そのため、仮説7は支持された。日常的に他者との関係がうまくいっていないなかったり、対人関係で悩みを持っていたりすると対人関係上のストレスをなくすために他者との関わりを避けようとし、登校回避感情と登校回避行動が高くなるのだと考えられる。

最後に、媒介分析を用いて親の養育態度が大学生の不登校傾向に影響を及ぼすメカニズムについて検討を行った結果、母親の過干渉は賞賛獲得欲求の増加を介して大学生の登校回避感情に負の影響を及ぼす一方、対人ストレスの増加を介して登校回避感情に正の影響を及ぼすことが示された。母親の過干渉は賞賛獲得欲求と対人ストレスの増加を介して登校回避行動に正の影響を、拒否回避欲求を介して登校回避行動に負の影響を及ぼすことが示された。母親の温かい養育態度は賞賛獲得欲求の増加を介して登校回避行動に正の影響を及ぼし、拒否回避欲求の増加を介して登校回避行動に負の影響を及ぼすことが示された。以上より、母親の過干渉や温かい養育態度が登校回避感情や登校回避行動に正の影響を及ぼすメカニズムもあれば、負の影響を及ぼすメカニズムもあることが示された。

また、父親を対象とした分析において、父親の温かい養育態度が対人ストレスの減少を介して登校回避感情および登校回避行動に負の影響を及ぼすことが示された。

本研究では、親の養育態度を母親と父親に分けて測定し、それぞれの影響について検討を行った。その結果、父親の養育態度よりも母親の養育態度の方が他の変数との有意な関連が認められやすかった。Sato et al. (1997)や菅原他(2002)が行った調査研究において、父親よりも母親の養育態度の方が子どもの心理特性との関連が多く認められており、一緒にいる時間が長い母親の影響が大きいことが考えられる。

本研究の限界点として、参加者に回答を求めた親の養



育態度は「過去」の養育態度を尋ねるものであるため、記憶のゆがみによって、実際の親の養育態度とは異なる測定結果となった可能性がある。そのため、現在の親子関係についても調査を行い、その2つが不登校傾向に及ぼす影響に違いがあるのかを検討する必要がある。次に、不登校傾向の平均値や標準偏差が調査を行う時期によって変化する可能性があるため、学期の始めと終わりに調査を行い、調査時期による平均値や標準偏差の変化や他の変数との関連について検討する必要がある。また、本研究は一時点の調査であり、例えば拒否回避欲求が高いために登校回避感情や行動が変化するか、あるいは登校回避感情や行動が高いために拒否回避欲求が変化するかといった因果関係が明らかになっていない。今後は縦断研究を行い、登校回避感情や行動と他の変数との間の因果関係を明らかにしていく必要がある。さらに、本研究ではパス解析の結果、モデルに含まれていた変数によって、登校回避感情の得点の分散の10%、登校回避行動の得点の分散の17—18%しか説明されなかった。登校回避感情と登校回避行動を対象とした堀井(2016)の調査研究では、自己否定感や心身不調といった規定因が挙げられている。今後は本研究にこれらの心理的要因や身体的要因を組み込み、大学生の不登校傾向を説明するモデルを洗練することが望まれる。最後に、本研究では普段、大学の授業に出席している大学生を対象としたが、この結果が授業に出席していない、不登校状態にある学生にもあてはまるのか定かでない。そのため、不登校状態にある学生のデータも取得し、本研究で得られた知見がこれらの集団にもあてはまるのか検討を行うことが求められる。

## 引用文献

- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2018). 平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(確定値)について Retrieved from [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/30/02/\\_icsFiles/afieldfile/2018/02/23/1401595\\_002\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/02/_icsFiles/afieldfile/2018/02/23/1401595_002_1.pdf) (2018年11月4日)
- 橋本 剛 (1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, 13, 64-75.
- 橋本 剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, 48, 94-102.
- 堀井 俊章 (2013). 大学生不登校傾向尺度の開発 学生相談研究, 33, 246-258.
- 堀井 俊章 (2014). 大学生の不登校傾向と対人恐怖心性との関連 横浜国立大学教育人間科学部紀要, 16, 135-143.
- 堀井 俊章 (2016). 大学生の不登校傾向に影響を及ぼす心理的要因 横浜国立大学教育人間科学部紀要, 18, 106-114.
- Hayes, F. A. (2017). The PROCESS macro for SPSS. Andrew F. Hayes, Ph.D. Retrieved from <http://afhayes.com/index.html> (December 14, 2017.)
- Kitamura, T. & Suzuki, T. (1993). A validation study of Parental Bonding Instrument in a Japanese population. *The Japanese Journal of Psychiatry and Neurology*, 47, 29-36.
- 小島 弥生・太田 恵子・菅原 健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.
- 三ツ村 美沙子・高木 浩人 (2011). 大学生における賞賛獲得欲求・拒否回避欲求と両親への社会的勢力認知との関連 愛知学院大学心身科学部紀要, 7, 23-31.
- 水田 一郎・小林 哲郎・石谷 真一・安住 伸子・井出 草平・谷口 由利子 (2009). 大学生に見出されるひきこもりの精神医学的な実態把握と援助に関する研究 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業——思春期のひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究——平成20年度総括・分担研究報告書, 79-101.
- 水田 一郎・小林 哲郎・石谷 真一・安住 伸子・井出 草平・谷口 由利子・草野智洋 (2010). 大学生に見出される不登校・ひきこもりの実態把握と援助に関する研究 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業——思春期のひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究——平成19~21年度総合研究報告書, 53-55.
- 森田 典子・蓑崎 浩史・宇田川 詩帆・嶋田 洋徳 (2015). 親の養育行動に対する生徒の認知が養育行動と社会的スキルの関連に及ぼす影響 日本教育心理学会総会発表論文集, 57, 651.
- 岡安 孝弘・嶋田 洋徳・丹羽 洋子・森 俊夫・矢富 直美

## 親の養育態度が大学生の不登校傾向に及ぼす影響

- (1992). 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究, *63*, 310-318.
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L., B. (1979). A Parental Bonding Instrument. *British Journal of Medical Psychology*, *52*, 1-10.
- 笹川 智子・猪口 浩伸 (2012). 賞賛獲得欲求と拒否回避欲求が対人不安に及ぼす影響 目白大学心理学研究, *8*, 15-22.
- 佐々木 淳・菅原 健介・丹野 義彦 (2001). 対人不安における自己呈示欲求について——賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との比較から—— 性格心理学研究, *9*, 142-143.
- Sato, T., Uehara, T., Sakado, K., Nishioka, K., Ozaki, N., Nakamura, M., & Kasahara, Y. (1997). Dysfunctional parenting and a lifetime history of depression in a volunteer sample of Japanese workers. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, *96*, 306-310.
- 関口 奈保美・三浦 正江・岡安 孝弘 (2011). 大学生におけるアサーションと対人ストレスの関連性——自己表現の3タイプに着目して—— ストレス科学研究, *26*, 40-47.
- 島 義弘 (2014). 親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか——内的作業モデルの媒介効果—— 発達心理学研究, *25*, 260-267.
- 菅原 ますみ・八木下 暁子・詫摩 紀子・小泉 智恵・瀬地山 葉矢・菅原 健介・北村 俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—— 家族機能および両親の養育態度を媒介として—— 教育心理学研究, *50*, 129-140.

Influence of perceived child-rearing style of parents on school  
non-attendance tendencies in undergraduates:

Motivation for praise seeking and rejection avoidance, and interpersonal  
stress as mediators

Ayaka Hori<sup>1</sup> and Akira Hasegawa<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Graduate School of Human Relations, Tokai Gakuin University

<sup>2</sup>Faculty of Human Relations, Tokai Gakuin University

Abstract

The influence of retrospectively reported child-rearing styles of parents on school non-attendance tendencies in undergraduate students was investigated. Undergraduate students ( $N = 204$ , mean age = 19.95 years,  $SD = 3.33$ ) completed self-report measures that assessed the perceived child-rearing style of their parents until they were 16 years of age, as well as their current praise seeking and rejection avoidance motivation, interpersonal stresses, and school non-attendance tendencies. Results indicated that over-protection of mothers was indirectly and negatively related to feelings about school avoidance via an increase in the praise seeking motivation, and positively related via increased interpersonal stress. In addition, over-protection of mothers was indirectly and positively associated with school avoidance behaviors via increased praise seeking motivation and interpersonal stress, and negatively related via increased rejection avoidance motivation. Furthermore, mothers' care was indirectly and positively associated with school avoidance behaviors via increased praise seeking motivation, and negatively associated via increased rejection avoidance motivation. These findings indicate that mothers' rearing style has both positive and negative indirect effects on school non-attendance tendencies in undergraduate students, whereas the influence of fathers' child-rearing style on children's school non-attendance tendencies was weaker than that of mothers.

Keywords: non-attendance tendencies, child-rearing style, praise seeking motivation, rejection avoidance motivation, interpersonal stress

